

投稿論文の書式、注、引用文献について補足(内規)

(英語教育学論文用)

制定：2016年3月28日

『日本英語英文学』の論文書式について、基本的には諸先生方が普段用いられているスタイルが尊重できるような緩やかなものを考えておりますが、全体の統一という観点から、また経費の節減という事情もございまして、以下の諸点を共通の書式として頂ければ幸いに存じます。以下、学会誌、学会ホームページ上で公開されている「投稿規程」、「投稿論文の書式」と重複する部分も少なからずありますが、どうぞご了承下さい。なお、英語学・英語教育学論文用内規制定にあたり、従前の「書くための指針として(内規)」は特に英米文学論文用とされましたが、英語教育学で論文を執筆する際にも重要な事項が書かれておりますので、そちらもご参照下さい。

1. 書式、字体、枚数など

	英語論文	日本語論文
原稿サイズ	<ul style="list-style-type: none"> A4用紙横書き、MS Wordで、天地左右に2.5 cm(1インチ)のマージンを取り、1ページ25行の設定とする。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語論文と同じ。
字体・ポイント	<ul style="list-style-type: none"> 本文・注のいずれにおいても、字体はCentury、ポイントは12ポイントを使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 本文・注のいずれにおいても、日本語はMS明朝、英語はCentury、ポイントは12ポイントを使用する。
原稿の長さ	<ul style="list-style-type: none"> 上記の設定で、論文、書評論文の場合は32ページ以内、研究ノート、書評の場合は16ページ以内。なお、図表、注、参照文献もこのページの制限内に収める。 	<ul style="list-style-type: none"> 英文論文と同じ。
英数字、マルカッコ、コンマ、コロンの、セミコロン、ピリオド	<ul style="list-style-type: none"> 全て半角文字を使用する。 コンマ、コロンの、セミコロンの後には半角1文字分のスペースを空ける。 文末のピリオドの後には半角2文字分のスペースを空けて次の英文を始める。また、段落の初めは半角5字分のスペースを空ける。 カッコの前後には半角1字分のスペースを入れる。例(地の文)：Brown □(2015, p. 321)□discusses.... 	<ul style="list-style-type: none"> 全て半角文字を使用する。 英文の引用をする場合、コンマ、コロンの、セミコロンの後には半角1文字分のスペースを空ける。文末のピリオドの後には半角2文字分のスペースを空けて次の英文を始める。また、段落の初めは半角5字分のスペースを空ける。 日本語の地の文においては、カッコの前後には基本的にスペースを入れない。欧文と和文の境目も同様にス

		<p>ペースを入れない。但し、地の文及び参照文献表で文献に言及する際は、年号を示すカッコの前に半角1字分のスペースを入れる。</p> <p>例(地の文):「鈴木□(2008)では、…」</p> <p>例(参照文献):「鈴木繁幸□(2008)「英字新聞ヘッドラインで使用されるレトリックについて—スポーツ欄を考える」『日本英語英文学』No. 17, 17-28.」(下記、「2. 注、参考文献など」も参照のこと)</p>
一重カギカ コ(「 」)、二 重カギカコ (『 』)、ヤ マカッコ(< >)	<ul style="list-style-type: none"> 基本的に使用しない(が、どうしても使用せざるを得ない場合には全角文字を使用する)。 	<ul style="list-style-type: none"> 全角文字を使用する。
原稿の1ペ ージ目	<ul style="list-style-type: none"> 論文タイトルは、太字、センタリング(中央揃え)。3文字以下の前置詞、接続詞、冠詞を除くすべての語頭を大文字にする(例: During, on, the, When)。 その後、1行アケで本文を始める。 氏名、所属などは記さない(それらの情報や謝辞などは表紙に記すこと)。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語論文と同じ。
スペース	<ul style="list-style-type: none"> 各節、注、参照文献、例文の前後は1行空ける。 パラグラフの冒頭は5スペースインデントする。 	<ul style="list-style-type: none"> 英語論文と同じ。
注	<ul style="list-style-type: none"> <u>punctuation</u> の後に、“In the process of debating,¹ we are able to learn logical thinking and critical thinking.²”のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとする。 	<ul style="list-style-type: none"> <u>句読点の</u>前に、「…と考えられる¹。しかし、Iwamoto (2015)では²、…」のように、注番号の前後にカッコなどを付さず、上付けとする。
見出し番号	<ul style="list-style-type: none"> Introduction は(0 節からではなく)1. Introduction のように、1 節から始める 	<ul style="list-style-type: none"> 「はじめに」あるいは「序論」は(0 節からではなく)「1. はじめに」のように、1 節から始める。

<ul style="list-style-type: none"> 小節番号は、3.1. Strict Identity のように、数字の後にピリオドを置く。 	<ul style="list-style-type: none"> 小節番号は、「3.1. 代案」のように、数字の後にピリオドを置く。
---	---

2. 引用方法

英語論文
<ul style="list-style-type: none"> 本文中の引用では、著者名の後ろに、出版年(と引用したページナンバー)を入れる。 <p>Indeed, the introduction of these skills was considered one of the efforts to westernize Japan (Suzuki, 2008).</p> <p>According to Matsumoto et al. (2009), debate is used to discuss an issue between affirmative and negative sides in order to persuade listeners logically.</p> <p>In a recent study of language learning motivation, Brown (2015, p. 321) discusses gender-related differences in learning foreign languages.</p>
<ul style="list-style-type: none"> 他者の著作物の記述をそのまま引用する直接引用の場合、引用文が 40 語未満であれば、以下のようにダブルクォーテーションマークで文中に組み込み、引用箇所の最後にページ番号を沿えてカッコでくる。引用箇所の文末にはピリオドを付記せず、ページ番号のカッコの外に付記する。 <p>According to these results, Smith (2010) suggested that the “aptitude is the fundamental part of language learning for many Japanese learners of English” (p. 301).</p>
<ul style="list-style-type: none"> 引用が 40 語以上の場合、5 スペースインデントし、以下のように引用する。 <p>Learners who lack motivation in the survey appeared to possess very high language anxiety and low intrinsic motivation and needed extra attention and praise for what they could do and what they were good at, which they do not usually receive from teachers (Smith, 2010, p. 302).</p>
<ul style="list-style-type: none"> 複数の著者を引用する場合 <ul style="list-style-type: none"> 2 人以内の場合、本文中の引用箇所では、著者全員を常に列記する。 <ul style="list-style-type: none"> → Iwamoto and Shibuya (2015) 著者が 3 人以上且つ 5 人以内の場合、初出の引用箇所では著者全員を列記し、2 回目以降は、第 1 著者名のみ表記し、et al.で省略する。 <ul style="list-style-type: none"> 最初の引用箇所 → Iwamoto, Shibuya and Suzuki (2015) 2 回目以降からの引用箇所 → Iwamoto et al. (2015)

- ・ 著者が 6 人以上いる場合、初出から第 1 著者名のみを表記し、et al.で省略する。
最初の引用箇所 → Iwamoto et al. (2015)

- 地の文においてカッコ内で列記する場合
(例) ... such a perspective (e.g., Harter, 1999).
(例) ... developmental aspects (Holec, 1981; Wenden, 1991).
(例) ... in the traditional L2 classrooms (Neugebauer, 2011).

日本語論文

- 本文中の引用では、著者名の後ろに、出版年(と引用したページナンバー)を入れる。

成田 (2013)は、特に日本語と英語のように言語系統も累計も違い、文法と語彙に共通性が全くない外国語を習得する場合、未習の文法的な特徴に気づくには、全般的な文法知識が必要であるとしている。

この分類に従えば、日本の学校英語教育の英語が EFL に属するという事は明らかであり、シンガポール、パキスタン、その他多くの国々に見られる ESL とは性格を異にすることがわかる(大谷, 2013, p. 55).

- 他者の著作物の記述をそのまま引用する直接引用の場合、短い引用(目安として、3-4 行以内)は、一重カギカッコ(「 」)で囲み、地の文に組み込み、(直後に)カッコ内に典拠の個所を示す。

外山 (1984)は「わが国の英語英文学界の誇るべき業績の1つに英文解釈法の確立がある」(p. 137)と切り切っている。

山田 (2006, p. 168)は、バイリンガルの共通基底能力とは、「言語を客体化する能力」すなわち「言語によって言語を観察しコントロールする能力」であり、最初から備わっているわけではなく育てるものであるとしている。

- それ以上の長さにわたる長い引用の場合、改行のうえ、5 スペースインデントし、以下のように引用する。

菅原 (2011)は以下のように論じている。

現在の教育制度の枠組みを考えた場合、教室における英語学習だけで英語が話せるようになると考えるのは無理があるし、学校の教室では「話す」ことよりも優先して教えるべきことがあるはずだ。まずは基礎的な英語力を身につけ、直読直解のプロセスを訓練することが大事である。話すことはそのあとでよい。そのほうが、長い目で見れば話す力も伸びてくるはず

である。

(菅原, 2011, p. 224)

- 複数の著者を引用する場合
 - ・ 2人以内の場合、本文中の引用箇所では、著者全員を常に列記する。
→ 岩本・渋谷 (2015)
 - ・ 著者が3人以上且つ5人以内の場合、初出の引用箇所では著者全員を列記し、2回目以降は、第1著者名のみ表記し、「他」で省略する。
最初の引用箇所 → 岩本・渋谷・鈴木 (2015)
2回目以降からの引用箇所 → 岩本他 (2015)
 - ・ 著者が6人以上いる場合、初出から第1著者名のみを表記し、「他」で省略する。
最初の引用箇所 → 岩本他 (2015)
- 地の文においてカッコ内で列記する場合
 - (例) …だと主張されている(e.g., 野村, 1999)。
 - (例) …という様々な立場が存在する(岩本, 1981; 鈴木, 1991)。
 - (例) …などのヘッドラインの特徴が見られる(鈴木, 2011)。

3. 注、参考文献など

	英語論文	日本語論文
注(Notes)	<ul style="list-style-type: none">・ 注(Notes)は「参考文献」の前に入れる。脚注形式ではなく尾注形式にする。・ 出版年等の情報は「参考文献」で明記し、必要最小限度の情報にとどめる。	英語論文と同じ
参考文献(References)	<ul style="list-style-type: none">・ Referencesは本文中で引用したもののみを載せる。・ アルファベット順に並べる。・ 共著者の場合、andではなくアンパサンド(&)を使用する。・ 雑誌は、巻数、号数、ページ数を明記する。	<ul style="list-style-type: none">・ 参考文献は本文中で引用したもののみを載せる。・ 英語の文献、日本語の文献を混在させてアルファベット順に並べる(別々に分けない)。・ 共著者の場合、中黒点(・)を使用する。・ 雑誌は、巻数、号数、ページ数を明記する。

4. 参考文献の例(参考文献リストのスタイルは、APA styleに準ずる)

英語論文	
学会誌掲載論文	Shibuya, K. (2008). Changes of motivational intensity in learning a foreign

	<p>language – A study of university students in Japan. <i>Studies in English Linguistics and Literature</i>, 18, 1-16.</p> <p>Williams, M., & Burden, R. L. (1999). Students' developing conceptions of themselves as language learners. <i>The Modern Language Journal</i>, 83, ii: 193-201.</p> <p>Pena-Shaff, J., Martin, W., & Gay, G. (2001). An epistemological framework for analyzing student interactions in computer-mediated communication environments. <i>Journal of Interactive Learning Research</i>, 12, (1), 41-68.</p>
単行本中の掲載論文	<p>Shibuya, K. (2015). The developmental processes and patterns of Japanese students' motivation for learning English. In K. Shibuya, T. Nomura, & S. Doi (Eds.), <i>Vantage points of English linguistics, literature, and education</i> (pp. 133-143). Tokyo: DTP Publishing.</p> <p>Giles, H., & Smith, P. M. (1979). Accommodation theory: Optimal levels of convergence. In H. Giles & R. N. St. Clair (Eds.), <i>Language and social psychology</i> (pp. 45-65). Oxford: Basil Blackwell.</p>
単行本、著書	<p>Nomura, T. (2006). <i>ModalP and subjunctive present</i>. Tokyo: Hituzi Syobo.</p> <p>Lightbown, P. M., & Spada, N. (2006). <i>How languages are learned (3rd. ed)</i>. Oxford: Oxford University Press.</p> <p>Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). <i>A comprehensive grammar of the English language</i>. London: Longman.</p>
日本語論文	
学会誌掲載論文	<p>松倉信幸 (2007).「英和辞典における感情を表す過去分詞形容詞の表記」『日本英語英文学』 No. 17, 17-26.</p>
単行本中の掲載論文	<p>山田七恵 (2015).「時制の一致の教授に対する一考察」渋谷和郎・野村忠央・土居 峻 (編)『英語と文学、教育の視座』(pp. 169-179) 東京: DTP 出版.</p>
単行本、著書	<p>鈴木雅光 (2000).『例外の文法』東京: 東京精文館</p> <p>永谷万里雄・清水和子・仙土真由美・松倉信幸・鈴木繁幸・木内 修 (編) (2006).『言語と文学の饗宴: 岡田春馬帝京大学名誉教授就任記念論文集』東京: DTP 出版.</p>

5. 附則

この内規は 2016 年 4 月 1 日から運用し、『日本英語英文学』第 26 号より適用する。

(了)